



TITLE:

佛國モンドール温泉場と其附[近]

AUTHOR(S):

田中, 阿歌麿

CITATION:

田中, 阿歌麿. 佛國モンドール温泉場と其附[近]. 地球 1924, 2(1): 68-85

ISSUE DATE:

1924-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182713>

RIGHT:

佛國モンドール溫泉場と其附近

田中阿歌麿

一、モンドール

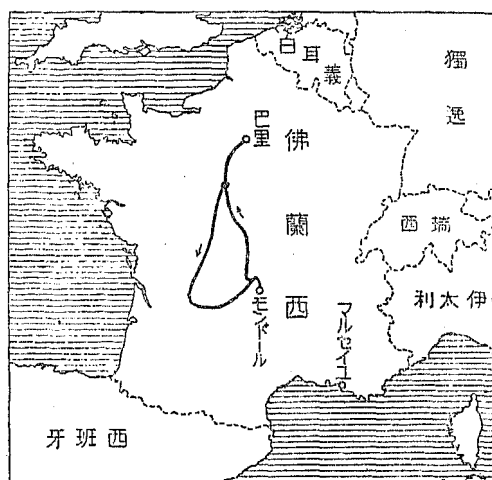
夏の或日フランス中央臺原に散在して居る火山湖を見學すべく之に向ふ事にした。處で山間跋涉の都合上先づ避暑地又は溫泉場に行く事にした。斯くすれば溫泉場の様子も知り且は此のオーベルギエ Auvengne の片田舎はフランスでも大分文化の遅れた所と聞えて居るだけに人文地理上の觀察の上からも面白からうと思つたのである。パリに在るセーブル Sévres の寓居を出でフランス中部の Les Eyzies 近く處に前史期の人類遺趾の見聞に二三日を費してからペリグー Périgueux よりモンドール Mont Dore に向つた。此の日はフランスの夏には珍らしい暑さであるのに殆ど終日の汽車旅行で疲れ果て午前四時頃モンドールの終點驛に着いた。入浴季節であるからホテルは定めし満員で部屋を得るには困難でもあらうと豫期して下車した。停車場は町端れより遠く隔りたる川の邊に在る。列車から吐出された多くの人々と驛を出て見れば數多の自働車は旅館より旅人を迎

へに來て居る。部屋は番頭に尋ねれば皆満員との事で一人も我に應ずるものはない。止むなく一個の手鞆携へ並樹ある一條の道を街の方へと辿り路傍一二の俄下宿の様な所を訪れて見たが更に同情して呉れない。途方に暮れた私は其の中旅客無料案内所と云ふ看板のある所を見付けて之れへ飛込んだ。宿を尋ねる一組の老夫婦が盛に交渉をして居る。汗を拭ひつゝ此人等の話の濟むのを待つて居る。日は暮れかゝつて來るので氣が氣でない。私の番となり相談を掛けると今は到る處ホテルや下宿は満員で普通民家すら、殆ど全部間借客で充され、例年にない繁昌、到底氣に入る所は得られぬ。見れば貴方は一人身の學生らしく見えるから(外國人には日本人の年齢は一寸分らぬ)此處より程遠からぬ所只一つの屋根裏の一室があるが、夫れで我慢は如何と云はれたので嬉しき儘に案内を受ける事にした。行つて見れば場末の草原の中にある一軒家の三階建である。家の全部は夫々人に貸し渡し、主人公夫婦は庭の隅に小屋掛をして其の中に住んでゐる。正直そんな爺様が部屋の内をした。見れば細い階段を昇りつめた四階屋根裏の一室で一個のベッドと一尺四方位の机が一臺と小さな椅子が一つある。そして其の周圍は壊れかゝつた家具等の物置になつて居る。窓は只一つ日本の引窓の様な装置のものがある。今しがた迄西日で照付けて居た風通しの悪い一室、息が切れる様で、片時も居られそうもない。椅子に昇り背延びして窓より顔を出せば辛ふじて乳首の邊まで出る。斯くして涼氣を求める外はないのであつた。市中に出で此の夜は或るホテルで晩食を濟せ

たが餘りの疲勞に市中を見物する元氣もなく床に入つたけれども殆ど睡り得られなかつた。斯の如き室も間代は頗る高く、一日實に十五法(約一圓五十錢)といふには驚かざるを得なかつた。

翌日朝平素朝寢坊の私も非常な暑氣の爲に早く起きた。朝食は主人の小屋で辨する事に豫て約してあつたので、此處へ行くと主婦は予を迎へた。正直相な百姓婆さんは色々取なして呉れるが、オーベルギヤ Auvengnat の土語を用ゐるので大部分解し得なかつた。此の住居の内部を見ると、無論木造手造りのバラックで、二部に分たれ、一室は座敷、食堂、臺所兼用のものである。朝食には大きな井の様な茶碗にコーヒー一杯鼠色をしたパンの大きな一片と云ふので無論牛酪も砂糖も與へられない。老婆は氣の毒相な顔をして此頃は物價も非常な騰貴であるから、朝食一食二法五〇(二十五錢)を申受けたいと云ひ出した。主人は隣室から紙と筆を持ち出して宿帳代りにし住所姓名を書せた。すると色々話を始め貴方は大層言葉が好く解るが御國ではフランス語の先生でもあらうか等言ひ出し貴方の御國は最近五十年間に於て驚くべき進歩をした。世界大戰に際しても少なからず我々を助けて呉れたが誠に感謝の至りである。斯く御國が一躍して大國の列に加はつたのは全く良き爲政者を得たからである。と畏多くも明治大帝の御名を申上げ盛んに御聖德を頌へられた。フランスでも大統領が努めて國民の意に叶ふ様にやつて呉れるが一國の基礎は矢張り立君制でなくては駄目である。貴方の國が明主を得た事は實に羨しき事である等語つた。

さて朝食も兎に角済んだので散歩に出た。此町はドルドーニュ Dordogne 川の右岸に規則正しき狭い町を作て居る。街の一部は右側の山地にかゝり階段状をなして建られて居る。町の入口に行くとき女の馬子が木蔭に幾つとなく驢馬を繋いで小兒の客を待つて居る。それより禮拜堂の前を通つて行



ではあるが軒を並べて居る。賣品は温泉場の常として繪葉書、圖類、其の他雜貨等が主であるが日本邊の温泉場と大部趣を異にして居る。それは土産物といふよりも寧ろ日用品が多い事で中には高

くと町役場で佛國の吊旗を揚げて居るのが目についた。之は米國大統領の永眠に對する弔意を表したものである。その隣は郵便局で避暑客で雜踏を極めて居る。此處より大通りを進むと大廣場に出る。之に面して右側に大なる建築物がある。之れ即ち浴場である。多くの浴客が朝湯の出入で非常な賑はひである。此處の觀察は後にし之れより左に向ふと大なる一流旅館が軒を連ねて居て、此處には米人や英人で賑はつて居る。此の邊の街での目抜の所であるから多くの店舗が僅か一町許の間

價な指輪、首飾等の裝身具店や仕立屋等もある。斯る店は滞在客が晚餐會や夜會その多種々なる催しの折を目當に相當賑つて居る。それより川縁の公園様の所に出た。此處には劇場と俱樂部とが其の一隅に設けられ浴客が楽しく其の目を過す様になつて居る。川を隔てゝ向ふは靜な町で別荘があちこちと杜の間に見えて居る。それより又市内の小徑を見た。此處には自動車遊覽申込所があり、戸口には種々なる面白相な遊覽の廣告が掲げてある。私は此處に就いて其の附近の遊覽の計畫を立てたのである。之等の遊覽は大抵半日の行程で一回一人につき二十法より四十法位であるから割合に廉く且迅速に馳け廻れる譯である。それ故に數日間に亙る種々なる遊覽を申込んだ。そして毎日二度の食事をなすべく瀟灑な料理店を見出し此處で滞在中の食事を約束して來た。それより一浴を試むべく溫泉場に行つた。

抑も此處の溫泉といふのは毎年六月一日より十月一日迄が季節で其の土地が山間の海拔一〇五〇米にあるから氣候は涼しく時々夜は寒い位であると云はれて居るので、その設備に於てウィッシーVichy等一流の世界的浴場には及ばないが先づフランス一流の溫泉場と云つて良からう。此處に入込み來る客は英米人の外はフランス人が最も多いのである。此の町の人口は二千人位であるが其の四五倍の浴客があるといふ。

次に溫泉場に宿から通ふ人々は何れも厚きフランネル様の浴衣を纏ひ、帽子をかむり、首に布を

纏て居る。之は湯冷めを避ける爲である。又婦人等は昔高貴の人々が用ひた様な形の籠に乗り前後に各一人の男が擔いで行く様等異様に感ぜられた。溫泉場に入り一浴したが此處は男客には男が世話し女客には土地の風俗をした若き女で日本の湯女の様な者が世話をして居る。又聞く所に依ると一療治は三週間でその料金は特等四百法、一等二百五十法、二等百五十法の定めであるといふ。私の這入つた所は一回八十法で、即ち一等の料金に相當して居る。尙入浴時間は朝數時間と、午後二時間位で其の他は絶對に入浴できず、日本の有様とは大部異つて居る。尙溫泉の湧出口は都合十一あつて、重碳酸曹達鐵、硅酸アルセニツクを主成分とするものでラヂウムも澤山含んで居るとの事である。

此の溫泉は火山岩の裂罅より湧出するもので、溫度三十八度乃至四十七度で、二十四時間に九十萬立を湧出しておる。又主として呼吸器病に效果があると云ふ。此の溫泉場は一八九〇年より四年を費して作つた立派な大建築で縣立であるが會社がそれを經營し飲料、蒸氣風呂、吸入其他種々なる療法が行はれて居る。又此の建物は曾てローマ時代に浴場のあつた所で之等の遺跡は現今場内に包括されて居る。

日も暮れかゝつたので晩食の爲め先きに約束して置た料理店へ行つた。手狭な食堂は最早や中流の間借客で満員の姿、食卓は次々と何回も開かれる。家の娘と二三人の俄雇ひの田舎婦人として給仕も

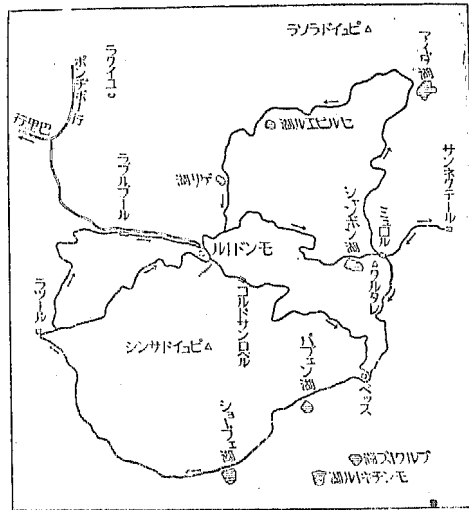
手廻り兼ねる有様であつた。食事は粗末ではあるが一寸氣のきいたものがあり種々な男女の相客との談笑も案外面白く一人旅の心地もしない。食後公園を散歩した。此處は此土地での晴れの場所であり流行づくめの男女が廣くもない公園を埋め銘々に椅子を持ち寄り三々五々卓子を圍んで涼しい風の間に聞えて来る樂堂のコンサートを心地よく聞いて居る。其の傍カシノ(俱樂部)の方は大きな電燈で輝やいてゐるが内部へは暑くて這入る氣がしない。客も餘りに見えない様である。此建物には Reyde-Chaussée 「一階」に喫茶室、撞球場等があり、Le Hage 「二階」には劇場、踊踏室を始め圖書閱覽室、通信室談話室もあれば、又バカラ Baccara といふトランプの一種やプチシユボー Petits Chevaux (小馬)といふ賭博等をする室も設けられて居るとの事である。

又公園の一隅の川に沿ふた所に雜貨の露店が並んでゐる。此處でレース手織に用ふる枕を賣つて居たのを面白く見之れを一つ土産に求めた。

二、モンドール附近のドライブ

第三日此日早朝より天氣よく暑熱甚だし。町の南端に出で大瀧の見ゆる所其の川下が急流をなして、扇狀地の上を深く侵刻して居る所に少しの木影がある。其所には最早や涼を追ふ多くの人達が見える。水端の石に腰を卸して老年期火山の地形を遺憾なく表し其岩頭は高く聳えて居る。ビュイ

ドサンシー Puy de Sancy 火山を遠方に眺めた。其邊りの谷間は却々面白そうであるが動く氣にもならず夫れより町の東の方に田で索線鐵道で一寸六分許り行き約百七十五米高まつた所にある運動場に行つて見た。木は深く生ひ繁つて氣候は多少涼しい。晝前は此所に過した。夫れより市中で食



デアース村を通り過すと松林の内に這入つた。幅廣き道は九十九折になつて次第に下る。其内水面の遠方に輝くのが見えた。足下には谷が次第に深くなり小さな瀧等もあつた。やがて一つの村落に

出でそれよりシャンボン Chambon の一寸した聚落に出た。此處は人口八〇〇程の所であるが避暑客は大分に見えた。古風な人家の間に第十二世紀の會堂が半ば廢墟の様になつたのが一寸面白かつたが又此地はローマ時代の城址の様なものも見受けられた。車はシャンボン Lac de Chambon 湖の砂濱に沿ふてやがて其の東岸にある茶店様のものに着いた。此所は緩かな弧を描いて居る砂濱で前面に湖を扣へた好個の避暑地である。フランス旅行者クラブが此地をカンピング・ステーションに選定した所で、二五〇〇方米の分譲地が設けられて居る。此所には可なり多くの旅人が散歩等して居た。此湖は面積六〇宿位であるが周圍は小高き山に圍まれ又水面には數多の樹木鬱蒼たる小島が散在して居る。而して湖畔にも樹木多く、青い水に倒影し又附近に牧場等もあり、尙赭色の熔岩が湖に臨み低き崖等をなし、其調和よき風景は賞するに餘りあるものである。深さは堰止湖の常として餘りに深くない。鍾鉛は五・八米より下らないとの事である。此湖は始め川筋にタルタレ火山 Puy de Taret が噴出したために出来たのであると云はれて居る、此山は湖面上僅かに八〇米の圓錐で、流れ出づる川は其麓を廻つて居る。されどある學說によればタルタレ火山が噴出した頃には湖は既に存在して居て其爲めに水位が高まつたのみであると云ふ。之れは湖の北岸にある一火山と同一の岩石が湖中可なり沖まで存在して居ると云ふので、湖の始めての成因は山崩れで堰止めたのであると云はれて居る。此處に停車時間約三十分簡單なる觀察を了へて再び車に乗る。今問題で

あつた火山は海拔一〇六八米で湖の北東に當り絶壁を見せて居る。之れは第三紀の火山で、切開された火口の殘址であるが火山の風景として頗る面白い。一火山の山頂にある「ユロル Murole」の古城址を右手に眺めながらアイダ Aydat 湖に向つた。

火山の澤山並んで居る間を縫ひ乍ら、廣漠たる野原を走り幾度となく熔岩流を横斷した。此邊の火山は日本で云へば霧島火山群の如き群成火山で概して高からず。噴火の時代が古く、多くは一面に木が繁つて居る。中にはビュイドラソラ Puy de Lassolas の大なる火口の半ば破壊され赭色の内壁を見せて居るものもある。此火口から噴出した玄武岩の熔岩流の末端はアイダの湖を堰で居る。此湖畔に出て見れば、其堰止められたる様や小島が水面に浮ぶ様等我甲州の精進湖に酷似して居る。精進湖及他の又富士山麓の湖の如く排水口は熔岩下にひそんで表面から見えて居らぬ。此光景は車上よりの通りすがりに見たに過ぎないのである。日は餘程西山に傾き稍々冷氣を覺ゆる頃自働車は路傍に停車した。運轉手は此の左手へ歩みて、一二分の所セルビエール Lac de Servières 湖云ふがある。十五分間の停車中裕に見物が出來ると云ふので、松の生ひ繁つた爪先上りの所を少しく行くと林間に湖光を認めた。此湖は火口湖の常で殆んど圓に近い短調無味の水面で、面積一五宿最大深度二六米との事である。湖の見物もそこそこに自働車を少しく飛せると深い谷の緑の小高き所に出了。谷に望んで大きなフォノライト(響岩)の岩脈が二つある。夫れより青々とした草木に蔽はれ

た火山岩の谷が開け遠方は早や日暮れの霞の内に没して居る。此處は曾てイギリス人が十四世紀の頃其上に要塞を作つた事がある等と傳へられて居る。間もなく峠に出づるラグリー湖 Lac de Gully 畔に出る。此湖は面積二二宿楕圓形の湖、海拔一二六〇米で最大深度は二三米、周圍悉く寂れたる牧場になつて居て風景亦捨難く、又モンドール温泉場より近いので湖畔の茶店の如きは遊客で雑沓を告げ客待ちの自動車等十數臺も居て俗化した所であつた。一行は下車して見る元氣も出ずモンドールへと急いだのであつた。

第四日午後より他の方面に自動車遊覽に出掛けた。前日と同じ道を取りシャンボンの湖畔を過ぎサンネクテール St. Nectaire の温泉場に向つた。此處はモンドール山地の南東の裾野ブラネーズ (Planèze) の低き所で海拔漸く七八〇米位である。人口一二七六の一小都會で細き川を挟んで温泉町をなして居る。此處より又一・五軒程隔つる小高き所に登れば古きサンネクテールの寺を中心として寂れた村がある。此温泉町は石器時代の遺跡や又石灰質の噴泉塔がある。大旅館の計畫もあると云ふが大戦で中止の姿となつて居る。此處の見物を終へ、又裾野の間を自動車を飛すこと暫くでベッスアンシャンデス Besse en Claudesse と云ふ長い名の村に着いた。此處は人口一五九八を有し一郡の首邑で人家も可なりにあつて旅館等も相當にある。海拔一〇三六米の所にあるから冬はスキ一の爲めに來るもの多くあると云ふ。村のカフェーに自動車を待たせて置いて市中を見物に出掛け

る。此村が安山岩の丘陵上の牧場の内に建てられたるにも拘らず、極めて原始的の氣分がある。町は幅狭く従つて薄暗い。家は多く熔岩を以て築かれ屋根は玄武岩で葺かれて居る。又屋根に尖塔を備へて居る十五・十六世紀頃の面白き家もある。中にもフランス王アンリー Fourth 四世の皇后マルグリット・ド・バロア Marguerite de Valois が住んで居たと云ふ家等頗る風雅なものである。町の出口には城門等も尙残つて居る。其他會堂等を彼方此方と見て居る内兼ねて聞いてゐた此地にある湖沼研究所を發見した。極めて狭き路次の様な所に民家並にあつて、極く質朴な小規模なものである。

其餘りに有名なもの、又フランス中央臺原數多の湖沼を控えて居り乍ら、其規模の小なるに驚いた内部の見物をも思つたが停車時間が僅に一時間であり、最早や發車が十五分位に迫つて居るから、之れを斷念した。それでせめては其入口の模様を紀念にと撮して居ると其戸口に二人の男が立止つて話して居て其一人が不思議そうに私を眺めて居たが其内に内部を縦覽してはと心切に言つて呉れたが遂に割愛した。それより自働車の方へと急げば早やぶーぶー云せて客を呼で居た。もう少しで置去りになる處であつた。それより暫く走ると、路傍の右手に一農家のある所で車は止つた。二三の農夫が頻りに牧草を取り入れて二階の物置へと夫れを運んで居た。すると之れを珍らし相に撮影して居る若き一組の夫婦が居た。良く見ると日本人！こんな山奥にまで同胞が遊覽に入込んで來る様になつたかと思つた。左手は一寸した草原で其處には清らかな細き流れがある。其流に沿ふて山

道を少しくたゞるとバズン Lac Pavin の湖が前に展開した。排水口の邊りに唯一軒の養魚番所があるのみで番人の婆々は五六頭の羊を放飼し新鮮なる乳を遊覽客に賣つて居る様はさすがに牧畜の國を肯かせ日本の湖畔には得難き光景である。此湖はオーベルギュ地方に於ける最も標式的の湖であつて海拔一一九七米に安座し長徑七五〇米短徑七三〇米と云ふ殆んど圓に近い湖で最大深度九六米殆んど我霧島火山群の御池に等しいものである。されど周圍は丈低きも絶壁を以て圍んで居て水は濃綠色日光中宮祠湖と同じ色で如何にも深そうに見え又石を一つ投げて湖の主が祟りをなして天忽ちに曇り大嵐となると云つて居る。故に土地の人達は常に恐怖の感を以て湖に接して居たのである。次に湖の名バズン Pavins 土地の言葉の Pavens バベンス(恐怖)から來たので即ち恐湖の意で日本の恐山湖と同じ様に其の名の起りに神祕的な傳説を持て居るのである。此湖は昔は底無し之地と云はれたもので實際此地方の湖沼の中では最も深いのである。そして錘鉛は湖盆の中央部で九六米まで下りるとの事で我霧島火山群の御池に等しいものである。次に從來は火口湖として知られて居たが最近の研究によると片麻岩地を破た爆裂火口湖だと云はれ又陷落湖であると云ふ説もある。此の湖は地下水で涵養せられて居るが湖の南岸に一小注入水がある。此川はクリュードスシー Creux de Soucy 「不安の穴」と云ふ火口内より來るもので此火口は深さ四四米程あつて其底には小さな湖を湛えて居り其水面には常に炭酸瓦斯が蓄積して居るとの事である。此の邊の湖沼の内では最もよ

く研究されたる者の一つであつて定常振動の現象等も研究され其週期は六一分であるとの事である約一時間の停車中忙しく此邊の觀察を終へ再び車中の人となつた。ショーベ湖 Lac Chauvet 等の山陰にある邊等は素通りでラツール La Tour の小村で一休みしブルブルの町へと急ぎ歸途に着いた。ラツールには柱狀玄武岩から成つた面白い岩脈を見た。村は細き道を挿んで建てられ一寸面白い所でモンドールよりも賑かな溫泉場であるが、俗化の氣分は免れぬ様に思はれた。

第五日此のモンドールに滞在するものは是非一度は行て見なければならぬ様に考へて居る一つの自働車遊覧がある。之れ此の地方の火山中最も名高きビュイドドーム Puy de Dome である。モンドールを出でラクユイユ Laqueuille 邊も迂回し、モンドール山地の北斜面を東の方へと走つた。其の内に眼前に東西に連なる一群の丈低き火山を見た。之はビュイ Puy 火山列と云ひ、日本の霧島のような群成火山で私はこれまで地文や地質の教科書でのみ知つて居た山で如何にも靈場にでも近づいた様な氣持がした。やがてビュイドドームの南麓に着いた。此處はクレルモンフェラン Clermont-Ferrand よりビュイドドームの山頂に達する鐵道の一停車場のある所である。何れからか來たか三四臺の遊覧自働車も置いてあつた。その遊覧客が汽車の來るのを待合せて居つた。此處より登山鐵道で登つた。此の鐵道は特殊のアプト式鐵道で其の構造は一寸他に類のないものである。世界大戰中一時運轉を休止して居つたが此の夏(一九三三年)から再び運轉を開始したので案外客が多いこの事

である。圓錐形の此の山を螺旋狀に登るのであるから車窓よりの風景は常に變化多く、頂に近づくと頂には各火山の火口は眼下にあつて恰も火山の模形を見て居る様であつた。やがて頂上近き終點に達し、其處の大なる旅館に休息した。此處から草山を少しく登る所にメルキュール Mercure の祠の廢墟がある。此處は昔ゴール Goullé 人の宗教崇拜の中心であつたと傳へられて居て此の祠は西紀二四四年に破壊せられたといふ事で、比較的新らしく（一八七三年）なつてから發掘せられたのである之に隣つて氣象臺がある。其の内部は普通縦覽を許さないが、入口近くに大廣間があつて此處で寫眞繪葉書の類を賣つて居つて何れも氣象臺のスタンプ等を押して呉れる。此の氣象臺は一八七六年に建設したものである。此の建物の側の草原には氣象機械等が据付けてあるが、同處に質素なる紀念碑があるのを見た。之には天文學者パスカル Pascal が一六四八年地球引力の實驗をやつたと記されて居る。此處を下り停車場附近より周圍の火山列の觀察に時を過し發車を待つた。此の火山群は海拔一〇〇〇米前後の花崗岩の基磐上一五〇米より五〇〇米位の山塊約八〇個の圓錐が一列に並で居る。只だピュイ・ド・ドーム 丈は高さ六〇〇米程もあつて他の圓錐を支配して居るの觀がある。之等の諸圓錐は一面森林でおほはれて居て稀に草原を見受けられる。そしてその多くは火口より雄大なる熔岩流を遠く引いて居るのも見受けられる。山の東方を見ると此の邊の大都市であるクレルモン・フェランの人家は手に取る如く夕陽に輝いて居て其の右手にロアニア Roazhat の溫泉場が谷間に半

ば隠れて居るのを窺ふ事が出来る。歸途は少しく道を變更してモンドールに歸つた。

第六日、此日は早く歸途に着く豫定であつたが、ベッス Besse の湖沼研究所が何となく懐かしく是非此の日を利用して見物したくなつたので午前中に自働車を飛す事になつた。此處への一番近道を取る事となり一四一四米の大瀧の上ノ高原に出た。クロアサンロベール Crivis St Robert の峠には原始的の只だ一つの旅舎があつたばかりで其の邊の原の中の稍々隔た所には二三の十字架が建てられ、其の景色は寂しいが、南斜面は遠く開けて風景は此の上もなく良かつた。それより此の邊で風景が最も良いと云はれて居る。シヨードフル Chaudesfour の谷に下り對岸の小高き所へと登つて行く。此の邊には多くの奇石や瀧が見えて居た。植物の採集等にも面白い所であると云はれて居る。此の谷間には各所に溫泉も湧出する。戦争中の不景氣で一時中絶して居たが近く溫泉場を設けるといふ事である。此の谷を越えて更に火山の裾野を走りベッスに着いた。研究所へ行けば前々目見た百姓男の様な人が出て來た。内部の縦覧を乞へば心地良く案内して呉れた。此の研究所は極めて狭く主任の住宅の外に中庭に只だ一室の研究室があつた。研究室内には二三の篤志家が研究して居た。一々紹介して呉れ暫く種々學術上の談話に時を移した。此の研究所はクレルモンフェラン大學の所屬であり同時に縣立の養魚場である。養魚場は少しく隔つた所に設られて居るのと養鱒の季節外れであるといふので其の方へは案内されなかつた。此の研究所が如何にも質素なものである

に拘らず年々立派な報告を出して湖沼生物學者を驚せて居るが、予が此の百姓男の様に思つた人はクレルモン大學の教授で毎年夏の間は主任として一家族を擧げて此處に研究かた／＼避暑をして居る。其の質朴さも少なからず驚いた。私はこれよりモンシネリー Lac de Montcineyre 湖へ行きたいと思ひ色々尋ねたが此の湖は此の地方にて恐らく最も面白い所であるが而し半日ではと云ふ事であつたから割愛する事にし分れを告げて辭した。歸途前々日に見洩したシヨール湖を見物してラッセルを廻り晝少し過ぐる頃モンドールに歸へつて來た。シヨール湖はババンより少しく大きな水面で成因は全くババンと同じである。午後モンドールの寓居を去る事とし午後三時頃汽車にてボンジボ Pontgibaud に行き此處の一小旅館に一泊することゝなつた。此處ではバリーでの知人若き二人の日本學生が居たから之を訪れ又其の地方の觀察をしやうと思つた。此處はモンドールよりクレルモンへの鐵道沿線の一小村である。第二流又は第三流位の避暑地で附近都市の人々が入り込んで居る。シユール Sioule の河は火山裾野に深き谷を作つて流れて居る。遙かに望めばビュイ・ド・ドールの火山列が西天に其の斷面を見せて居る。

シユールの川縁りを少しく散歩すると熔岩の散在して居る間稍々巾廣き細長き平地が川に沿ふてあり又一部は水澤になつて居る。之は熔岩流が川筋を堰めて一時湖を作つた址である。地圖を開き見ればビュイ・ド・ドーム火山からの熔岩流の堰止湖の残りである事が肯れる。土地の者に聞けば其

の水は毒水であると云つて居るが近所に鑛山がありその製鍊所が湖畔にあつた爲それより有毒水を流入したのが今猶沈澱して居るからである。此の夜は十數日來渴えて居た日本人と同宿の喜びに川鱒やザリガニ (*Astacus fluviatilis*) の料理に舌打ちし一夜の歡を盡した。

翌朝は此處より程遠からぬ熔岩流の上にあるシャザール Chazalou と云ふ廢墟を見様と思つたが遂に時を得なかつた。此の廢墟は一つの外郭を廻らし其の中に五十有餘の室がある。かつてはローマ時代逃走者が住んだ所であると考古學者間に言はれて居る。晝過ぐる頃汽車に乗り巴里へ向つた。

(モンドール地方の地理學的觀察は稿を改めて記載する事にする)

圖版第五說明

上圖はヒュイドドームの眺望である有名な群成火山であつて多數の火口が峰の集のやうに排列されてゐるのがよく見える、下圖はモンドールの温泉市街で街の一部は右側の山地にかゝり階段狀をなしドルドーギユ川に沿ひて狭い町を作つてゐる、